様々な経験を大川のPRに繋げたい

株式会社 近藤商事
取締役 近藤 将隆 さん

先月全国放送された鳥人間コンテスト。今大会は大川商工会議所青年部もチーム大川として出場しています。

今回はパイロットを務められた近藤さんにお話を伺いました。

一秒でも長く『大川』のPRを

「今年の1月、青年部総会後すぐに『まだ出られるかはわからないけれど、パイロットをお願いしたい』と声をかけられました。」

鳥人間コンテストに関してはなにもわからないところからスタートしたとのこと。ではパイロットに決まってから始めたこと、苦労したことなどはあるのでしょうか。

「お話を頂いた当時は体重が72kgでした。初代のパイロットだった方は、大会の時に55～56kgだったと聞いて、すぐにダイエットを始めましたね。大川は機体のほとんどを木で作る分、他の機体と比べると重いので、その分パイロットが痩せてバランスをとらないと。運動しながら引き締めたいとも思っていましたが、日中は仕事を、夕方からは大川の中学硬式野球チームの監督をしているので、なかなか時間が取れなくて、食事制限や食生活の改善をメインに体を絞りました。もちろん体作りもしましたが、あまり筋肉を付けすぎると今度は重くなってしまうので、そこも気をつけましたね」

パイロットとしてはもちろんですが、実際の機体の制作にも携わっていらっしゃったのでしょうか。

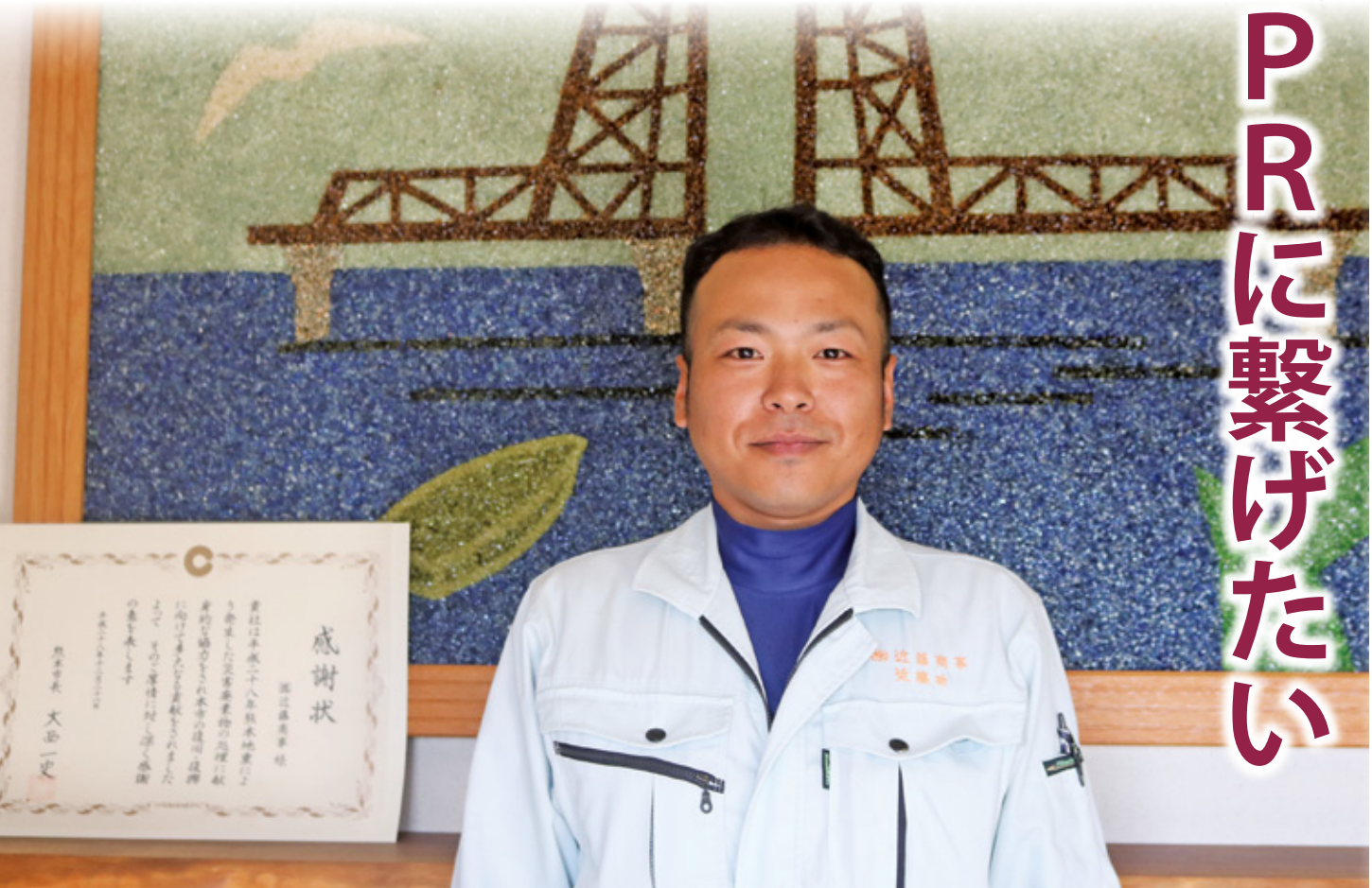
「制作現場にもできるだけ行くようにしていました。じっとしていたら欲に負けそうだなと思いましたので。制作に携わっている方、青年部のメンバー、皆さん優しいので差し入れをくださるんですが、ぐっと我慢しましたね。一緒に作業をしていたからこそ、その制作風景が頭に浮かぶので、自分に厳しくできたと思います」

実際の機体を使用してのテスト飛行も行われたとのこと。

「一度テストしてみないとわからないこともたくさんありますし、実際にやってみて改善したほうがいいところもありました。それがあってこそ、今回飛んだ機体にたどり着いたんだと思います。制作陣もほぼ徹夜で作業していたことを知っているので、思い入れも強かったです。制作に携わっていなかったら、たぶん違う思いで飛んだのかなと思います」

制作に携わられた方、またそれ以外の方々からはどのような反応をいただいたのでしょうか。

「青年部のメンバーからは当日着用するTシャツやヘルメットに寄せ書きをたくさんもらいました。なおさら、絶対に飛んでやる！という気持ちが高まりましたね。鳥人間コンテストを成功させよう、大川をPRしようという気持ちはみんな同じだったと思います。それから青年部OBや



大川の職人さんの助けも大変ありがたかったです。制作は老若男女が一緒になって行っているので、本当にオール大川で作り上げたものだったと思います」

本番はあまり恵まれたとは言えない天候でのフライトだったとのこと。

「前日に下見ができ、その時は『これがプラットホームか』と感動していたのですが、当日は悪天候なことも相まってコンディションが悪く、プラットホーム自体も下が滑るので、踏ん張りが効かない状態でした。一度見てはいたものの、プレッシャーもあってか、当日は全然違うプラットホームに見えましたね。それからこれで飛べなかったらどうしようという思いがありました。一秒でも長く大川をPRすることが自分の使命だと思ってましたから」

パイロットしか体験できないフライトの感想なども伺いました。「実際にバーンと着水した瞬間は息が止まりましたね」と話された近藤さんですが、衝撃はどれくらいのものだったのでしょうか。

「木が水に浮く力と勢いよく水に飛び込む体が反発して、肋骨のあたりから押し上げられたような感じで息ができなかったですね。水面に上がってからもすぐには息ができなかったです。なにより衝撃が一番きました。ただ落ち着いて振り返ったらプラットホームが目の前にあって、やってしまった！と思いました。その瞬間、制作に携わった皆さんの風景が浮かんで、申し訳ないという気持ちしかなかったです。皆さんが待っているところに行かなきゃいけないんですが、どんな顔をしていいのかわからなかったです。近づくに連れて申し訳無さが募りました。直後の取材では崩壊してしまって、何も喋れなかったですね。一瞬で終わらせてしまった申し訳無さ、悔しさが溢れました。取材が終わって、最初に倉重市長がありがとうと声をかけてくださったんですが、申し訳ありませんしか言えなかったです。やっぱり少しでも長く飛んでPRしたかったです。なにより大川をPRすることが目的でしたから」

一番の目的である大川のPRについて、近藤さん自身はどのように感じられたのでしょうか。

「PRは大成功だったと思います。機体を琵琶湖の砂浜に置きながらプラットホームまで移動していくんですが、ずっと『写真撮っていいですか』と尋ねられました。実際に会場へ行くまで、あんなに写真を撮られるとは思っていませんでした。会場にいたほとんどの人のアルバムに大川の木のきもち号があると考えると、すごく誇らしいです。『こんなところも木で補強できるんですか』と声をかけられた時は、『飛んだ後を見てごらん。壊れてないから』と答えたりもしていました。実際ほとんど損傷はなかったですね。また着水後の機体を片付けるときも木の香りがすごくて、通行人の方からも『いい匂いがする。あ、木の匂いだ！』と振り返って見てもらえたので、それが更によかったかなと思います。SNSなどにも数多く写真があがっていたようで、そういったところで大川をPRできていたと思います。応援団の皆さんからも『SNSを通じて大川をPRできてよかった、パイロットも無事でよかった』と言ってもらえてほっとしました」

来月の木工まつりや九州芸文館でも展示される予定なので、大川の職人の技術が詰まった機体をぜひとも隅々まで見てほしいとも話されました。また、もう一度パイロットとして鳥人間コンテストへ一緒に出場してほしいと声がかかったら？と伺ったところ、「即答でOKします」とも答えられました。

「怪我がどうのとかあると思いますが、まずそれを考えたら乗らないと言ってしまうと思います。でもこれが大川のためになるならば、また痩せて、次はもっと飛ばして大川のPRをします！という意気込みですね」

人との関わりを大切に

せっかくの機会なので、近藤商事についてもお話を伺いました。

「仕事内容としては、大川市を中心とした一般廃棄物の収集運搬がメインです。以前は青いバキュームカーで回っていましたが、現在はすべて赤に塗り直しています。社長が赤が好きだったのもあるんですが、他との差別化をするのが主な理由ですね。常に車の運転が必要な職種なので、車体を赤くしたことによって存在感も出て、従業員の運転意識も変わったかなと思います。それから浄化槽の維持管理、清掃業といった汚水処理関係全般も行っています。また、ガラス瓶のリサイクル事業にも乗り出したいと考えています。これからの時代、ガラスを処理していく中でなにかに役立てられないかと勉強しています。設備も整えているのが、どう実用化させていくかが、これからの課題のひとつでもありますね」

大川市近辺だけでなく、福岡県内外の災害支援にも出向かれているとのこと。

「主にゴミ処理の関係などで出向いています。熊本、朝倉、岡山にも行きました。同業の組合を通じてですが、こういったことにも積極的に参加し、少しでも手助けになりたいと考えています。ボランティアをしたからといって見返りはなにもないです。だけど現場を知って、現状を把握することが先々責任者の立場になった時に活かすことができたらいいと思っています」

近藤さんが仕事をされていく上で大事にされていることは、どのようなことでしょうか。

「あくまでも目に見えない仕事が主です。だからこそお客様とのコミュニケーションを取ることが大切だと思っていますし、信頼関係がないと仕事を任せてもらえないとも考えています。とにかくお客様と話して自分を知ってもらって、相手のことも知っていく。仕事に関しては自分たちが専門なのだから、責任をもってすればいいと考えています」

大川をPRできる人間に

最後に近藤さんの夢についても伺いました。

「子供たちに野球を教えていますが、まだまだ新米の監督です。でも先々は『大川で野球と言ったら近藤監督』と言ってもらえるような指導者になりたいですね。それから人付き合いを大切にしたいです。青年部活動でもいつかは会長をやってみたいなと思っています。今回のようなく、他間コンテストだけでなく、他にも大川をPRする方法が絶対にあるはずです。それを私が会長になるまでに見つけて、会長になった時にどーんと大川をPRできるくらいの人間になりたいですね。野球の指導者としてもそうですが、会社の一員としてもそうですが、顔が名刺代わりといえるくらい人と付き合っていきたいです。何事にも中途半端な生き方はしたくないですね。夢を追いかけるために、大川をPRするために、色々なことを経験して、最終的には大川のPRに繋げられる人間になりたいです」